

## 点字制定後の盲人教育の一端

介護福祉学科 澤田幸子  
Sachiko SAWADA

点字について（登場人物の敬称は略させていただきます）

点字とは盲人の文字、日本では点字、英語ではブレイル、フランス語ではブライユと申します。この点字は縦約7mm、横約4mmの長方形（これを1マスとよぶ）の中に、縦3点、横2列の6個の点の組み合わせ（1単位）で、文字や記号に対応させた横書の表音文字です。

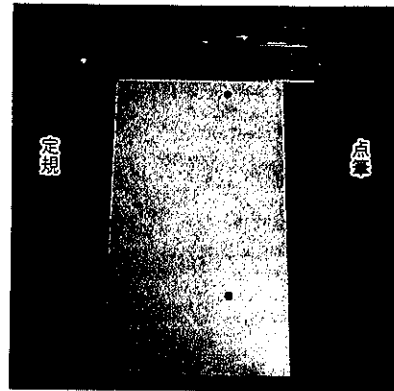
この点字はアルファベット、数字、楽譜は世界共通です。

点字を書く時には、点字盤（普通の点字盤はよこに32マス、縦に17段の量を打つことが可能で、1枚の用紙の表裏で最大1148字書くことができます。）

点字を書くときには、点字盤の上に点字用紙（薄い厚紙）を固定し、定規で用紙を挟み、点筆という打点器で右から1点、1点打っていきます。

読み取るときには、用紙を裏返しにして、打ってきた出っ張り（とつ面）を右手の第二指の指先の内側で読み取りますが、今度は左から右へと点の位置が逆になるわけですが、習得すれば自由に読み書きが出来るようになります。

点字盤（中村製）



日本で点字が制定されるまで

点字はフランスのルイ・ブライユという盲人が創案したものです。

19世紀のはじめ、パリの盲学校の先生をしていたブライユは、友人からフランス軍の砲兵大佐が、夜間の演習の時に暗くて文字が読めない場合の為の、線と点の符号のようなものを考え出したという話にヒントを得て種々工夫し考案した六つの点の組み立てになる「6点点字」を1824年に完成させました。これは文字の発明にも比すべき人類文化史上の大きな業績です。

この六点点字は、使いやすく、おぼえやすかったため、まず盲学校で更にフランス国内から世界中に広まり、日本にはイギリスを経て明治20年頃伝わってきました。

東京盲学校の先生で晴眼者（目の見える人）石川倉次は、その英語の点字から日本語の点

字を翻案するために寝食を忘れるほど工夫を重ね明治23（1890）年11月に完成し、この日本語の点字は正式に採用決定され今日に至っております。

### 点字制定後の盲人教育の概要

盲人に文字が出来たと言う事は、盲人にとって自分自身で読み書きが自由にできることであり、進歩向上であったが、世間一般の理解は薄く、盲人の中には教育を受けないまま家の中でひっそり暮す人々も多かった。

今日では点字は盲人の文字という認識はごくあたりまえですし、建物の階段やエレベーター等にも1階とか2階とか上、下の点字の表示があり、驚くことにビールや酒などの缶にまで点字が打ってあります。

このように盲人に対する理解が深まってきた一因に点訳奉仕活動があります。

この点訳とは、晴眼者の用いている墨字（すみじ）を点字に訳すこと。また反対に点字を晴眼者の読める墨字に訳すことを墨訳（大学の通信教育を受けている盲学生の提出のレポートなどで活動）と言います。

この点訳奉仕活動の拠点になったのは東京の日本点字図書館です。この図書館は昭和15（1940）年に本間一夫が私財を投じて創設した点字図書館です。

本間一夫は戦前に盲人で大学教育を受けられた数少ないお一人です。その勉学の過程を記し、当時の盲人教育の在り方の一端として述べます。

本間一夫は北海道の増毛町で網元や酒造業を営む裕福な家に生まれましたが、5才の時脳膜炎の後遺症で視力を失い、13才まで東京などで目の治療に専念しましたが回復せずついに私立函館盲啞院に入学します。

当時は盲児童には義務教育は免ぜられていました。

私立函館盲啞院は明治28（1895）年に函館にいたアメリカ人の宣教師の母が世間から放っておかれた日本の盲人の教育に深く同情し、私財を投じて訓盲会という盲人福祉の会をつくり、ここで点字やマッサージを教えました。盲人に技術を教える処は全国に六ヶ所しか有りませんでした。その後函館盲啞院となり現在の北海道函館盲学校です。

この盲啞院は初等部（小学校）6年と、中等部（中学校）4年に分かれていて全校生徒30人でした。

13才で入学した折り、学校では家での知識を考えに入れ3年生に編入しました。そして二学期からは実力が認められ5年生になり、二年間で初等部を卒業しました。

点字との出会いは入学の日、学校で手で触った「点字毎日」でした。

一般の人々の関心の薄い時代に点字毎日が週一回にしる読者も少なく、採算の取れない新聞を発刊して盲人文化向上に力を添え、今日まで続けておりますことは意義深い事です。

学校で勉強するには、まず点字を習得しなければなりません。受け持ちの先生は東京盲学

校（現在の筑波大学附属盲学校）の師範部を卒業したばかりの若い先生で、真剣に点字を教え、本間少年も点字に熱中し、一ヶ月余りで読み書きがほぼできるようになりました。

中等部では、鍼按（はりやマッサージを学ぶ科）で学びました。現在は盲学校の高等部には、普通科と理療科がありますが、当時は理療科に当る鍼按科だけでした。午前中は点字の教科書で普通科目や鍼按理論を勉強し、午後はマッサージや鍼の実地練習をしました。これは将来職業につくための必修科目です。

本の好きな本間少年は、クラブ活動では回覧雑誌「学海」の編集に大いに活躍しました。

学校ではまだ点字の印刷は無理でしたので一枚、一枚点字版で打って紐で綴じてつくりました。

点字の印刷はその頃、薄い亜鉛版を二つ折にして、そこに点字を足の力で打ち原版をつくり、この亜鉛版の間に点字用紙を挟みゴムローラーの間を通し、用紙に点をつくるのです。一枚つくるのに費用が高くなります。近年まで印刷はこの方法を使っていました。

現在点字書が容易にかつ多数作成することが可能になったのは、今日の印刷が、コンピューター技術が進み点字のプリンターが開発されて漸く可能になりましたが、実に約半世紀を要しております。

昭和10年（1935）年に中等部を卒業した本間が強く進学を希望したのは将来への目標があったからです。本間は中等部在学中に盲先覚者の岩崎武夫、熊谷鉄太郎の講演を聞き「目が見えなくても勉強し努力すれば人の役にたつことができる」との思いを深め、その後、盲人の父と慕われた吉本督（よしもと ただす）の著書にふれ、「ロンドンには世界一大きな点字図書館があり、全部の本を連ねると3マイル半（約5.6km）にもなると、本の少ない日本に比べて、心に強い衝撃を受け「盲人が晴眼者と同じように社会で生きていくためには点字図書館は必要だ」とはっきり目標にしました。

盲啞院では特別に一年の研究科を設け在学させ大学受験の応援をしてくれ、11年に兵庫県の私立関西学院大学専門部英文科に入学を果たしました。当時盲学生を受け入れてくれる大学は日本ではここだけでした。

そして14年英文科を首席で卒業しました。

大学での勉強は想像以上に大変でした。まず教科書や参考書は点字のものを用意しなければなりません。授業の前日には友人にその箇所を読んでもらい点字に直しておきます。ですから勉強の時間が取れません。仕方なく有料で点訳してくれる人を捜してもらい英文の点訳をできる人をようやく頼むことができ、高い料金は使いますが、勉強は大分助かりました。

しかし授業中の筆記は困りません。特に英語は点字で便利な略字（例 and= ⠠⠠⠠、knowledge= ⠠⠠⠠）があるのでクラスで一番速く書きとれるほどでした。ただ点字を打つおとがコツコツと響くので音の出ないよう膝の上に点字器を置いて気を遣いました。

試験の答えは点字では読んでももらえませんから、英語関係は英文タイプライター、それ以

外の法律、歴史、心理等はカナタイプで打つました。その努力は敬服してもあまりありません。

現代では、点字による受験等の場合は、一般に通常の1.3、あるいは1.5倍の受験時間が与えられ、出題も点字で行われている。

しかし当時は受験時間に特別の配慮はなかった。ただ部屋だけは別の室が用意され問題を読んでくれた。

大学では全て一般の学生と同様な指導をしたが、軍事教練だけは免除された。これは盲人に対して兵役の義務が免除されていたからである。この制度は大正14（1925）年から終戦の昭和20（1945）年まで学校に導入された制度でした。

### 点字図書館創設

昭和15年11月、大学を卒業してから一年半、東京盲学校の近くに小さな家を借り（日本盲人図書館）という大きな表札を掛け念願の図書館を発足させる。

蔵書約700冊、私財を投じて苦心して揃えた本です。点字の本は数が少なく手に入りにくい上に値段が高く、これだけ集めるのに血のにじむような努力と大変な費用がかかったのです。それに本の郵送に使う厚い布袋100枚、整理カード、これが図書館の備品の全て。職員は本間一人。

本間は、本の貸しだしを無料としましたので盲学校の学生が本を読み毎日のように訪れ、弱視の学生が郵送の宛名を書いてくれました。郵便局へは本間の幼児の時から「ばあや」が風呂敷で本の包みを背負って一日に何回も運びました。毎日のように点字書の読書に通った盲学生の中から指導的な仕事に就いた人が何人もできました。

日本に点字図書館ができたのは、この図書館が初めてではありません。新潟等でも何回か造られましたが規模も小さく継続が難しく何時の間にか閉鎖されました。

本間一夫の創設した図書館がいまでは国から予算が付く確固たる点字図書館として多くの盲人の文化向上に寄与していることは衆知のことです。

この点字図書館が資金面や蔵書の充実などの変な問題を克服して今日まで継続できたのは本間の誠実な人柄と図書館にかかる熱意に共鳴した素晴らしい応援者の方々の協力、実家からの厚い援護などの力も大きかったと思います。

### 点字奉仕活動

点字図書館を開いて、一番先にぶつかった壁は蔵書をどうやって増やしていけばいいのか、その悩みの解決方法として、応援者の中の一人後藤静香（ごとうせい香）が点訳奉仕活動（当時ヨーロッパやアメリカではボランティアとして活動していた）を提案してくれた。後藤静香は社会教育家として大きな実行力をもつ人であり、すでに点字も習い始めていたが、しっかり勉強して、盲人への理解ある人々を集め講師となって後藤の事務所で第一回の点訳者

育成の講習会を開催した。これが日本の〈点訳奉仕運動〉の出発点です。その後、晴眼者の中から優秀な点訳奉仕者がぞくぞくと生まれ点字図書館の蔵書充実に力を添えました。戦時中もその火は消えることなく続き、昭和28年から日本赤十字が活動の一つとしましたので全国的に広まり、今日の盲人教育への理解につながったと思います。現在年間六万冊の貸し出しをしています。

#### 盲人に欠くことのできない〈テープライブラリー〉

盲人教育を思うとき、テープレコーダーの登場です。昭和30年ごろからのテープレコーダーはミカン箱ほどの大きく重く高価なものでした。点字図書館では33年にテープライブラリーを発足させました。しかしこの活動が急速に利用されるようになったのは昭和三十年半ばから国内電器産業の大企業が採算を度外視して開発したカセットレコーダーの出現に負うところ大です。

中途失明者や点字が苦手な者、盲学生の勉強にも画期的な影響を与えました。現在では大小14の録音室が完備し、180人の録音奉仕者が活動しています。現在テープの貸しだしは年間65万巻もあります。

#### 盲人の現在の社会での生活

職業としては伝統ある三療（あんま、マッサージ、はり、灸）に四割もの人たちが頑張っています。

大学の門は、本間の入学した頃よりはずっと広くなり、盲人大学生は百数十人もいます。高校からの受験には点訳ボランティアが大勢応援してくれます。

医学博士、理学博士。教育学、法学、理学などの学者も十人以上がそれぞれの分野で活動しています。

音楽家としては、琴、三味線等の邦楽の他にバイオリニスト、歌手、作曲などの芸能人。

難しい司法試験に合格し二人の弁護士もできました。

また盲人の幸せを広げるために、盲老人ホームの経営、盲人の職業開発、点字出版等等大きく活動しています。 以上

#### 参考にした本

本間一夫著 『点字あればこそ』（善本社）

古澤敏雄著 『本間一夫 この人、その時代』（善本社）

お二方を存じあげておりましたので、参考に致しました。 以上

